

英語コーパス学会 Newsletter No. 79

July 1, 2015

■会長:堀 正広
■事務局:〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8 大阪大学大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付
■TEL:06-6850-5866 ■郵便振替口座:00930-3-195373(英語コーパス学会)
■URL: <http://jaecs.com/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com ■twitter: @JAEC2012

JAECs
Japan Association for English Corpus Studies

第40回大会報告

■概要

英語コーパス学会第40回大会は、2014年10月4日(土)と5日(日)の2日間にわたり熊本学園大学にて開催されました。九州で初めての開催となった第40回大会は、熊本市立必由館高等学校和太鼓部による勇壮で迫力満点の和太鼓演奏のオープニングセレモニーで幕を開けました。学術プログラムは田中省作先生(立命館大学)の講演、藤原康弘先生(愛知教育大学)と石井康毅先生(成城大学)による教材コーパスの構築と利用に関するワークショップ、永崎研宣先生(人文情報学研究所, 東京大学)によるXML活用法についてのワークショップ、石井康毅先生・藤原康弘先生に共同司会をお務めいただいたシンポジウム、さらに15件の研究発表とパネルセッション1件が行われるなど、バラエティに富み、かつ内容の濃い大会となりました。

まず、大会両日の午前中には、ワークショップが行われました。初日の第一部「小中高大の連携のための教材コーパスの構築と利用: 小学校英語ウェブコンコーダンスターの利用と教材のコーパス化」では、まず現状の小学校英語を把握するために愛知教育大学で開発された小学校英語ウェブコンコーダンスター(<http://corpus.gaikoku.aichi-edu.ac.jp>)のハンズオン実習が実施されました。藤原先生にはウェブコンコーダンスターの開発過程から、その活用法について詳しい解説をしていただきました。続いて石井康毅先生より教材のコーパス化を行う上で必要とされるスキルや念頭におくべき注意事項などについて詳細かつ判りやすい説明がなされたワークショップは「大変密度の高い充実したものだった」(参加者談)と好評でした。

二日目、第二部は「コーパス研究のためのXML活用手法」と題し、XMLの基礎的な知識の導入から始まり、デジタル化した資料の相互利用、interoperabilityを高めるために唱導されて以来数々の工夫と改良が加えられた国際規格Text Encoding Initiative (TEI)に準拠したShakespeareの戯

曲作品などを例にして、XMLを活用することでいかに正確かつ効果的にテキスト情報を引き出すことができるか、詳しい解説ならびにデモンストレーションが展開されました。BNCをはじめ、近年開発されたコーパスの多くはTEIに準拠したコーディングが施されていることを踏まえると、「コーパスの利点を最大限引き出すためにはXMLのスキルの必要性はますます高まっていくということを痛感させられる」(参加者)濃密なワークショップでした。

1日目の大会は、まず堀正広会長による開会の挨拶に続き、開催校熊本学園大学学長の幸田亮一先生に挨拶のお言葉をいただきました。次に、新井恭子先生(東洋大学)の司会のもと総会が行われました。まず、会計の小島ますみ先生(岐阜市立女子短期大学)より、2013年度会計報告及び2014年度予算案が示され、いずれも承認されました。会員の皆様には後日決算書と予算書を送付いたしますのでご確認ください。

続いて、事務局より当学会の新ウェブサイトについてのお知らせを行いました。これまで当学会のウェブサイトは同志社大学の西納春雄先生の研究室、その後日本大学の塚本聡先生の研究室のサーバーに長いこと「間借り」をさせていただいていた状態でした。この度、広報委員の石川慎一郎先生(神戸大学)とウェブ委員の金澤俊吾先生(高知県立大学)、阪上辰也先生(広島大学)からなるチームのご尽力により、英語コーパス学会独自のドメイン名を取得し、新たなウェブサイトとして生まれ変わりました。新しいURLは次の通りです。<http://jaecs.com/>

総会に続いて、学会賞・奨励賞授賞式が行われました。最初に学会賞選考委員長の井野洋一先生(中央大学)から学会賞および奨励賞について審査報告がありました。選考理由が説明された後、投野由紀夫先生(東京外国語大学)が2014年度英語コーパス学会賞の受賞者に決定したことが発表されました。授賞式では堀会長から投野先生に賞状、副賞が贈呈されたのに続き、投野先生より受

賞のスピーチが行われました。2014年度英語コーパス学会奨励賞には藤原康弘先生（愛知教育大学）と土屋知洋先生（防衛大学校）の2名が受賞者に決定しました。2名同時受賞は本学会で初めての事です。

2014 年度英語コーパス学会賞

受賞者：投野由紀夫氏（東京外国語大学）
受賞対象：英語学習者コーパス構築・公開と研究における国内および国際的功績と、コーパス研究に基づく一連の英語教育関連編著書および辞書編纂

2014 年度英語コーパス学会奨励賞

受賞者：藤原康弘氏（愛知教育大学）
受賞対象：『国際英語としての「日本英語」のコーパス研究—日本の英語教育の目標』（2014 ひとつじ書房）

受賞者：土屋知洋氏（防衛大学校）
受賞対象：A Semantic-Syntactic Study on the Differences between the That-Complement and the Zero That-Complement (2012 開拓社)

大会第1日の午後は3室を用いての平行進行となりました。うち2室は研究発表、もう1室では今回初めて取り入れられたパネルセッション形式で発表が行われました。研究発表では第1室安浪誠祐先生（熊本大学）と第2室福田稔先生（宮崎公立大学）の司会のもと、計5件の研究発表が行われました。第3室では堀正広先生の司会進行により、共同研究プロジェクト「次世代 *Dickens Lexicon Digital* の開発とそれに基づく後期近代英語研究」について3件の発表がありました。第1日の研究発表セッションの概要は本誌 pp. 3-5 に報告記事を掲載しておりますのでご覧ください。

その後、石井康毅先生と藤原康弘先生の共同司会のもとシンポジウム《英語教育・研究のための教材コーパスの構築と利用：実践例と課題》が行われました。このシンポジウムは「コーパスを作る」という大会テーマに立脚して企画された午前中のシンポジウムと有機的にリンクした内容で構成されており、藤原康弘先生、中條清美先生（日本大学）、内田諭先生（九州大学）、そして石井康毅先生の4名による発表はそれぞれ、教材・用例コーパス構築・活用に関する具体的な事例の報告がなされるとともに、さまざまな課題の指摘がありました。コーパス研究のテクノロジーやスキル、学術的知見をいかに教育実践に活用するかに

ついで議論から、今後のコーパス研究と教育現場のリンクの実質化へ向けた展望と課題にも話がおよび、フロアからの質問を誘って大いに熱の入ったシンポジウムとなりました。（シンポジウムの概要につきましては、本誌 pp. 10-11 掲載の報告記事をご参照ください。）

大会1日目終了後の懇親会は、67名の出席がありました。鎌倉義士先生（愛知大学）の司会のもと、会長の堀正広先生の挨拶、そして鳥飼慎一郎先生（立教大学）の乾杯の発声で始まりました。懇親会のテーブルには、熊本名物の馬刺しやからし蓮根、いきなり団子をはじめ、数多くの郷土料理が並び、合わせて球磨焼酎や九州各所の地酒や焼酎も添えられて、研究発表者の方々やパネルセッション、シンポジウム講師の先生方を囲んでの談話が盛り上がる格好の燃料となったようです。懇親会は午後8時半に赤野一郎先生（京都外国語大学）の締め言葉で終了し、その後スペインバルに場所を移して2次会が行われ、フラメンコのライブ鑑賞などでさらに活況となりました。

大会2日目は9時半からのワークショップに続いて、投野由紀夫先生の司会のもと、田中省作先生（立命館大学）による講演《タスク駆動型のコーパス構築と情報処理技術》が行われました。田中先生は、英語科学論文の表現の質判定、学校文法に基づく英文解析を行うための新技術開発など、これまでに進めてこられたプロジェクトとその成果、そしてそこから見えてくるコーパス構築の新たな実践的展開について語られました。情報学ご出身のコーパス言語学者ならではの、イノベティブな方法論を生み出す、独自性に富む視点こそコーパス言語学の新天地に向けられているという印象を強く残す刺激的な講演でした。

第2日目の研究発表も3室に分かれて、長加奈子先生（北九州市立大学）、脇本恭子先生（岡山大学）と柳朋宏先生（中部大学）の司会のもと、計11件の研究発表が行われ活発な議論が交わされました。（講演ならびに2日目の研究発表の詳細につきましては pp. 5-10 掲載の報告記事をご参照下さい。）

第40回大会は2日間を通して、116名の参加者がありました。大会が関門海峡を渡って開催されるのは初めてのことであったにもかかわらず、数多くの熱心な参加者に恵まれたのは、質量共に充実したプログラムが組めたことによるところが大きかったのではないかと思います。

最後に、会場の準備などをお引き受けいただいた堀正広先生、渡辺拓人先生、Joseph Tomei 先生（熊本学園大学）と竹下裕俊先生（尚絅大学）、魅

力的な講演・シンポジウム・ワークショップの企画を考案いただいた西村秀夫先生を始めとする大会企画委員会の諸先生方、副会長の投野由紀夫先生、事務局会計担当の小島ますみ先生、大会実行委員の新井恭子先生（東洋大学）、家入葉子先生（京都大学）、石川慎一郎先生（神戸大学）、井上永幸先生（広島大学）、高橋薫先生（東京理科大学）、滝沢直宏先生（立命館大学）、地村彰之先生（広島大学）のご尽力と細部にまで配慮の行き届いたご協力のおかげで今大会が盛会に終わったことを喜び、心よりお礼申し上げます。加えて大会実施に協力いただいた熊本学園大学の学生諸氏にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

■ 研究発表セッションの概要

第1日第1室

「語彙の洗練性指標に対するテキスト長の影響：L2 学習者の課題英作文と Parallel sampling method を用いて」

石井卓巳（筑波大学大学院 S）

本発表では、語彙の洗練性指標の信頼性検証の一環として、テキスト長が語彙の信頼性指標に及ぼす影響に関して論じられた。語彙の洗練性指標は、学習者の産出語彙の測定・評価の一観点を成す語彙の豊かさ指標の一種であり、第二言語習得研究の分野では、学習者の熟達度、アウトプットの質、産出語彙の語彙的発達等を示す指標として用いられてきた。しかしながら、語彙の洗練性指標の妥当性・信頼性を検証した研究は非常に限られており、更に、時間や熟達度の制約によりテキスト長が短くなりやすい L2 学習者のアウトプットに対して使用する場合、妥当性・信頼性の高い結果を算出できるのかも不明瞭である。

そこで本発表では、他の語彙の豊かさ指標に対するテキスト長の影響を精査する際に用いられてきた Parallel sampling method という手法と、アジア人英語学習者コーパス ICNALE 採録の日本人英語学習者による 2 テーマ計 136 の総語数 200 語～300 語の課題英作文を用いて、既存の語彙の洗練性指標（Beyond 2,000, AG, ATTR, P_Lex, S）に対する 50 語、60 語…190 語、200 語の 16 種類のテキスト長の影響を検証した。

分析の結果、2 テーマの課題英作文で共通して、Beyond 2,000, AG, ATTR は 200 語以下のテキストではテキスト長の影響を受け易いこと、及び S が 50 語～200 語の範囲でテキスト長の影響を最も受け難いことが明らかになった。但し、S でも 100 語以下の場合にはテキスト長の影響を受ける可能性があるため、100 語以下のテキストに対し

ては、語彙の洗練性指標の使用に慎重であるべきだという指摘がなされた。また、本研究で取り扱ったテキスト長の短いテキストでは P_Lex はエラーとなることが多かったため、今後更なる検証が求められる。これらの発見より、語彙の洗練性指標の開発だけでなく、信頼性・妥当性の検証の重要性・必要性が示唆された。

質疑応答では、語彙の洗練性指標の信頼性検証に関係する他の要因（エッセイのトピック等）や、P_Lex の算出過程とエラーに関する議論などが行われた。

「中学校におけるコーパスを利用したデータ駆動型英語学習の実践—ペーパー版 DDL からタブレット端末 DDL まで—」

西垣知佳子（千葉大学）

小山義徳（千葉大学）

神谷昇（千葉大学）

中條清美（日本大学）

本発表では、公立および国立大学附属中学校で、コーパスを活用したデータ駆動型学習（Data-Driven Learning : DDL）の実践効果の検証結果を報告した。実践は中学 2, 3 年生を対象として、DDL 群ではコンコーダンスラインと発見を引き出すタスクを印刷したワークシートを主に使用し、さらにコーパス検索ソフト *AntPConc* を利用して、パソコンやタブレット端末を使った DDL も取り入れた。対照群では教師が文法事項を説明する指導を行った。指導効果の検証には、文法知識に関する事前・事後・遅延テスト、文法ルールの気づきテスト、質問紙調査を行った。

文法知識テストの結果から、DDL をとおして文法知識が習得されたこと、また対照群と比べて DDL 群では遅延テストの保持に効果があったことなどが確認された。また英文を見て英語の文法ルールを発見できるかを見る気づきテストの結果から、DDL 群では、気づきの目が養われていたことが確認された。さらに質問紙調査からは、自分で発見して学ぶ学習によって、学んだことが記憶に残ると学習者が感じていたことがわかった。

質疑応答では「提示する用例によっては、生徒を誤った理解に導く恐れがあるのではないか」という指摘があった。例えば、能動態と受動態の学習において、前者で動詞の目的語としてふるまっている名詞句が後者では文の主語に対応しているという語順の違いに注意を向けさせると、学習者は、両者は語順が異なるのみで、文の意味や機能には違いがないと考えてしまう可能性がある。今後は、ステップを踏んで、意味の微妙な違いや文

の機能にも学習者の注意が向くようにしたい。また、提示する文法項目を絞り切らないと、指導者が学習ターゲットとして想定した文法項目に注意が向かないこともあるのではないかという質問があった。コンコーダンスラインの英文は、ターゲットである項目以外は既習事項となるように、また学習者が確実に学習ターゲットに気がつき、規則を抽出できるようにワークシートやタスクを工夫していききたいと考えている。

「英語 CEFR レベルを規定する基準特性の抽出 —文法項目の自動抽出とその評価—」

投野由紀夫 (東京外国語大学)
石井康毅 (成城大学)

本発表では、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) に基づくコーパスの構築と、それに基づく機械学習による文法項目分類実験の結果を報告した。研究目的は、主に A1~B2 の各英語力レベルを規定する基準特性 (criterial feature) としての文法項目を特定することである。

コーパスは CEFR レベル別の海外の ELT 教材から構築したもので、約 152 万語 (A1~C1) である。それに加えて、後述の抽出精度確認のために、CEFR レベルに再分類した JEFLL コーパス (約 67 万語) と、現行の学習指導要領に基づく中 1~高 1 の教科書コーパス (約 27 万語) も利用した。文法項目は、東京外国語大学佐野洋研究室で作成された、語形・レマ・品詞のパターンとして定義された学校文法項目リストを利用した。

各文法項目に該当する用例の抽出精度については、適合率 (precision) は概して高く、再現率 (recall) は網羅的な評価は難しいものの、特にパターンが単純な文法項目については十分に高いことを評価実験により明らかにした。学習者コーパスの場合も適合率は概して高いが、パターンが長い文法項目の場合には、エラーが含まれる表現にマッチしないことから再現率は低下する。

一定の抽出精度が確保できたため、抽出によって得られた各文法項目のレベルごとの度数データを予測変数とし、CEFR レベルを目的変数として機械学習による分類タスクを行った。機械学習の結果からは判別に寄与した言語特徴群を知ることができ、基準特性のリスト作成に有益な情報を得ることができる。その結果、分類器の中ではランダムフォレストが A, B レベルの分類には最も有効であった。また J48 (決定木 C4.5+データ更新+枝刈り) の分類木構造は概ね直観と合致するものであった。

今後、文法項目・パターンの整理・精緻化を

行った上で、異なる機械学習アルゴリズムの相互比較・評価、属性の重みづけを勘案した変数の整理・統合を経て、CEFR レベルを判別する言語特徴としての文法項目の具体的な特定を行う予定である。

第 1 日第 2 室

「動詞 *order* に後続する要素について」

西原俊明 (長崎大学)

動詞 *order* に続く一つの形式として、(1) の不定詞節がある。先行研究では、目的語コントロール構造 (persuade 型) を仮定する分析と中右 (1994), Barrie and Pittman (2004) のように、expect 補文 (TP 構造) を仮定するものがある。この発表では、ECM 構造 (TP 構造) を想定すると、より多くの言語事実を説明できることを明らかにした。

(1) He *ordered* me to take syntax.

また、本発表では、for-句が生起できることを示し、この形式の意味的特徴を明らかにした。

(2) Apr 2009...Cambridge Magistrates Court also *ordered* for him to be supervised by the Probation Service for 12 months

(www.dailymail.co.uk)

(2) は、イギリス英語に多く見られる例であり、主語位置に *judge* が多く生起する形式である。(2) の *order* の意味は、“order X such that” はなく、“order that it be the case that” の意味で用いられている。

(3) I *ordered* for Pat to be examined by a doctor.

(meaning Pat is unconscious, and I issued my order to the hospital staff.)

for-句を伴う *order* 補文は、指示の間接的な受け手という意味的特徴が見られる。(3) では、Pat が意識を失っている状況で病院スタッフに指示を出す場面で *order* が用いられている。Pat は、直接の指示の受け手ではない。つまり、問題の形式において、for-句は指示が直接的でなく、間接的な受け手であることを表している。

「語形成パターンの生産性：BYU-BNC hapax による検証」

森田順也 (金城学院大学)

本研究の目的は、大規模コーパスから抽出される hapax 一頻度 1 の語一に基づき各種の語形成型の生産性を測定し、その理論的含意を示すことにある。生産性の計測法に関する先行研究を概観した後で、大規模コーパスの hapax を活用した測定法 (Baayen and Renouf 1996) を妥当なものとして採用する。Baayen and Renouf は生産値 (P) を、hapax 数 ÷ トークン数とする。本研究では、-ish の P を「80 種の -ish 派生語の中で 18 種の新語を生み

出す力」と捉えて、タイプ数を分母に据える測定法を提案する。さらに基体形に応じた P を重視し (Aronoff 1976), 精密生産性—特定の基体形の新語を生み出す率—を採用する。

上記の測定法に基づき、5 種の名詞形成接辞-ation/-al/-ment/-ity/-ness, 4 種の形容詞形成接辞-al/-less/-ic/-ical, 及び 3 種の動詞形成接辞-ize/-ify/-ate が、計 20 種の基体形 (X-ize/X-ify など) に関してどの程度生産的かを、BYU-BNC の語分析機能を活用して数値化する。

3 点の調査結果が得られた。①当該過程の創造性が確認できる、②競合する接辞の P の比較によって自動的に接辞が決まる部類と一方が優先される部類が判明する、③単純語への接辞付加は生産的でない。以上の一般化は、「競合」によって複雑語の語形が生産的に加工されるという仮説を基本的に支持する。

フロアからの質問・コメント、および発表者からの回答は以下の通りである。質問 1: hapax とは、資料の規模に係わらずある資料中に 1 度しか現れないものを指すのか。→ その通り。質問 2: 屈折の扱いは? → 原形に戻してカウントする。質問 3: 接辞が複数存在する場合どの派生語を対象にするのか。→ 最終接辞の派生語を対象にする。コメント 1: 接辞の生産性には基体の語種を考慮すべき。→ 提案された生産性の測定法は、語種による基体の制限も包含している。コメント 2: 接辞の生産性には音韻的制約を考慮すべき。→ その通り。形態的要因を音韻的・意味的要因から分離した上で、形態的な生産性の計測をすべき。今後の課題としたい。

第 1 日第 3 室

パネルセッション

「次世代 *Dickens Lexicon Digital (DLD)* の開発とそれに基づく後期近代英語研究」

堀 正広 (熊本学園大学)

永崎研宣 (人文情報学研究所)

今林修 (広島大学)

本セッションは、英語研究において最初の学士院賞を受賞された故山本忠雄博士(1904-91)の最終目的である *Dickens Lexicon* 作成のためのプロジェクトの報告である。セッションでは、*Dickens Lexicon Digital (DLD)* の概要、ウェブデザイン上の工夫と特徴を説明した後、*Dickens* のイディオム研究や英語研究においてどのような有用性があるか、通時的及び共時的な視点から実際の研究例を示しながら論じた。

DLD は、次のような *Dickens* のイディオムに関するデータベースと様々なデータベース及び機能を搭載する予定である。

(1) 多機能搭載型レキシコンのデータベース

- ・レキシコンの検索条件は、見出し語、品詞、定義、作品名、章、引用、*OED* の引用の有無、コメントであるが、これらは各項目に関してアルファベット順、作品順、並び替え等が可能。また、コンコーダンス、コロケーション検索機能、統計処理の機能を搭載。

(2) 電子テキスト

- ・*Dickens* の全作品のテキストだけでなく、英国の 18 世紀、及び 19 世紀の小説の電子テキストを可能な限り網羅的に収録。
- ・検索・ソート・語彙リスト生成機能を備えたコンコーダンス、統計処理機能を有す。

講師の発表後、いくつか質問がでた。たとえば、一般的なイディオムの定義と山本博士が考えていたイディオムの違いは何か。創造的なイディオムという場合、創造的というのは何を以て創造的と言うのかなど。

山本博士のイディオムの考え方では、辞書的な意味ではなく、社会的・文化的、さらには文脈的な意味を含意していれば一語でもイディオムとなる。また、参照コーパスとしての 18 世紀や 19 世紀の作家に見られないイディオムであれば、それは *Dickens* 的な創造的イディオムと言えるのではないか、など活発な質疑応答が交わされた。

第 2 日第 1 室

「Random Forests による英語理学療法論文特徴語分析 —Corpus of Contemporary American English を参照コーパスとして—」

八野幸子 (大阪大学大学院 S)

本発表では、近年公開された Corpus of Contemporary American English Full-Text 版のサブコーパスで、医学・医療系学術文章の集積である Academic Medicine を参照コーパスとした、英語理学療法論文コーパス (発表者編纂) における特徴語分析に関する研究について、その結果が報告された。

主たる分析手法として、Breiman (2001) 開発のアンサンブル学習による判別手法である Random Forests (RF) が用いられた。近年の RF による言語研究では、文学作品の著者判別や、科学論文の分類等が行われているが、本研究ではそのような研究のうち Charles Dickens と Wilkie Collins の共著作品を分析した田畑 (2014) の Random Forests による判別指標語彙の抽出が参照された。同研究では、カイ 2 乗値および対数尤度比を用いた、従来の特徴語抽出法では、ある特定の作品に特徴的に生起する語を全体の特徴語としてしまうという問題点が指摘されており、この問題点をカバーする

ために RF が用いられている。発表者による本研究のパイロット研究でも、1つの論文に特徴的に生起する語が全体の特徴語として抽出されてしまうという事例が観測されたことから、本研究では主たる分析手法として、RF が用いられ、従来の特徴語抽出で用いられるカイ 2 乗値（イエーツ補正）および対数尤度比（本研究では G-score）による分析結果との比較が行われた。

その結果 RF による分析では、*rehabilitation, motor, mobility, walking, limb* など、理学療法分野において比較的汎用性が高いと考えられる語が特徴語の上位 30 項目内に抽出され、カイ 2 乗値、G-score で上位に抽出された SCI（傷病名）などは抽出されなかった。

この点から RF による方法では、従来の手法に比べて汎用性の高い語が抽出できる可能性が示唆された。

質疑応答では、コーパスデータの年代影響、理学療法分野の他の学術雑誌を元データとしても同様の結果がえられるか、コーパスの編纂手順等に関する質問があり、また判別寄与語彙の割り振りに関して、部分従属プロットや箱ひげ図による方法も可能であることが助言され、今後の研究課題が明らかとなった。

「学習支援用日英例文パラレルコーパス SCoRE の構築における課題：例文作成と訳出に焦点を当てて」

若松弘子（筑波大学大学院 S）

石井卓巳（筑波大学大学院 S）

中條清美（日本大学）

本発表は、学習支援用日英例文パラレルコーパス（Sentence Corpus of Remedial English; SCoRE）の構築、特に例文・対訳作成に焦点を当てた。DDL 実践用のツールとして、簡潔で自然な英語例文を集積・和訳を付与した SCoRE は、プロファイリング例文表示システムに搭載され、受動態や仮定法などの文法項目ごとに例文を提示できることが特長である。

SCoRE の構築手順は以下の通りである。1) 対象学習者の設定：リメディアルレベルの大学生（TOEIC300 点以下）、2) ソースコーパス（SC）の作成：米国の 4-5 年生レベル未満の 3000 万語の言語資料、3) 対象学習者の不得意とする文法項目の調査、4) 当該文法項目に対応するキーワードの選定、5) 英語例文の作成：学習に適した難易度・内容にするため、SC から抽出した英文を基に、NS の英語教員が文長と語彙の観点から 3 段階のレベルで作成、6) 日本語対訳の作成と確認。

日本語対訳の作成については、起点言語と目標言語の実質的な意味の等価よりも、対応する語や文法を用いた形式的等価の実現を基本方針とした。しかし、日英の視点の投影・移動の違いや語の意味範疇のずれなどにより、形式的等価を常に優先することは困難であった。また、例文作成者の NS の文法項目の分類と日本の英語教育における文法項目の分類が一致しないこともあり、例文の削除や修正を要した。

SCoRE 暫定版は <http://score.lagoinst.info/> で公開しており、著作権フリーの例文が無償でダウンロード可能である。授業実践者の必要に合わせて例文・対訳に変更を加えても構わない。なお、同じ略称を持つ既存のコーパスが存在するため、SCoRE という名称は将来的に変更予定である。

フロアからは、無償利用の範囲や、「教育向け」に配慮した際の使用できる語彙の難しさに関する質問、語彙・文法項目だけでなく文長も考慮した、CEFR に基づくレベル分けとの差異が興味深い等のコメントがあり、活発な議論が行われた。

「日本語を母語とする上級英語学習者の誤用にみられる時制スキーマ」

荒川和仁（東京外国語大学 S）

本発表は、東京外国語大学国際日本研究センターにおいて収集された英語エッセイを活用し、日本語を母語とする上級英語学習者の持つ英語時制スキーマについて分析、考察するものである。データとしては、学部 1 年生 70 名が学生生活や大学祭といった身近な事柄や環境問題等をテーマに書いた 296 組の提出エッセイ、添削済みエッセイ（総語数はそれぞれ 104,412 語、110,447 語）を使用した。誤用の抽出にはファイル比較ソフトを使用し、時制表現に関して記述の異なる 329 箇所を分析対象の誤用とした。

まず、添削前後の時制表現を基に誤用カテゴリーを作成し分類したところ、誤用の 7 割以上が 5 つのカテゴリーに含まれた。先行研究での指摘と同様に、単純現在、あるいは単純過去の誤用が大半を占めたが、使用頻度そのものの高さも影響したと考えられる。

次に、日英語の時制表現を対照し誤用の要因を検証した。単純現在を使用すべきところを単純過去とした誤用では、行為・出来事の結果残存を表せる日本語の過去時制（動詞のタ形）の影響と考えられる例が顕著であった。反対に単純過去とすべきところを単純現在とした誤用に関しては、現在及び未来時制の区別のない（どちらも動詞のル形で表せる）日本語と、主動詞の時制との相対的

な関係で従属する動詞の時制が変わりうる英語の違いによる誤用も見られた。

本研究による英語時制表現への教育的示唆として、5つのカテゴリーを基に時制表現の違いを認識させる指導や、特に誤用の多い単純現在及び単純過去に関して日英語の文法の違いに留意した教材・教授法の必要性に言及した。

質疑応答では、エッセイの添削過程に関する質問に対し、教員の指導の後、添削の方針に従って英語母語話者及び教員が担当したことが述べられた。コーパスの構成に関しては、執筆者にとって自由度の高いエッセイトピックについての説明がなされた。最後に、本研究からの指導への示唆に関して意見交換がなされ、今後の課題が明らかになった。

「多読学習において学習者が感じる「難しさ」の解明：リーダー・コーパス作成と分析」

加野まきみ（京都産業大学）

本発表では、京都産業大学の1年次英語必修科目で実施している「多読学習プログラム」で学生が読む2種類のリーダー（英語学習者向けに書かれた Graded Readers (GR) と、ネイティブスピーカー用に書かれた児童書 Youth Readers (YR)）の違いを客観的に示すために、2種類のコーパス (Graded Reader Corpus と Le Youth Reader Corpus, 各約 30 万語) を作成し、YR の言語的特徴を GR と対照しながら明らかにした。どちらも、低頻度語やコロケーションの置き換え、文の長さの調整が行われたリーダーで、レベル分けされており、学生は自分のレベルに合ったものを読んでいるにも関わらず、多くの学生が YR を読むことに「難しさ」を感じると報告したため、AntConc, Ant-WordProfiler, Microsoft Word 「読みやすさの評価」などのツールや、BNC や COCA などの語彙表を使って、YR の「難しさ」の要因を明らかにするための調査を行った。

その結果、YR は GR に比べて、異なり語数が約 2 倍多い、基本 1000 語の語彙の割合が少ない、レベル毎に顕著に語彙レベルが上がる、受動態の割合が高い、複雑な文構造 (e.g. 助動詞+受動態, 現在完了進行形) がある、基本語 (e.g. even, if, around, would) に大きな頻度の差がある、1 単語に複数の語法がある、状況描写の前置詞句が多く見られるなど、様々な側面で多様性と複雑性が見られ、これらが学生の感じる「難しさ」に繋がった可能性があるとして結論づけた。今後の課題としては、文の複雑な構造を測るためのタグ付けの必要性や、YR に見られる小児語やスラング (e.g. bow-

wow, icky, twerpy, jiffy) や、言葉遊び (e.g. run for office, pancakes), 比喩表現の影響を挙げた。また、実際に学生がどのような文構造、語法に難しさを感じるのかは実験的な手法での検証が必要である。

質疑応答では今回明らかになった以外の要素についても「難しさ」に繋がる可能性があるものが指摘された。日本人学習者になじみが少ないイギリス英語が多く含まれている可能性、フィクションというジャンルや場面設定に対する不慣れ、突飛なストーリーなど、今後考慮に入れるべき観点への示唆をたくさん頂いた。

第2日第2室

「Days Without End における乖離相克する人物描写：コーパスデータから見てとれる内的／外的ダイアローグの言語的特徴からの考察」

能勢卓（京都聖母女学院短期大学）

Days Without End (1934)において Eugene O'Neill は、仮面と二重俳優の手法を用いることにより、主人公 John Loving を素顔の John と仮面の Loving に分裂させて舞台上に登場させた。Days Without End はその内容に関しては極めて厳しい批評がなされた一方で、この作品で取り入れられた実験的演劇手法に関しては多くの研究者の関心を引き、特に仮面と二重俳優を導入したことにより登場人物の内面が巧みに描き出されている点などが先行研究において評価されてきた。Days Without End は内容と手法の双方で様々な議論がなされてきたのではあるが、その台詞の文体面に関してはこれまで十分な研究がなされてきたとは言い難い。そこで本発表において、文体分析の為に作成した Days Without End のコーパスから得られる語彙や文構造のデータを用いて、相反する人格を体現する John と Loving が発話する台詞にどのような言語的工夫が施されたのかに関して分析と考察を加えた。

今回の研究発表を通して、主人公 John Loving の乖離相克する二つの自我は、ダイアローグでの台詞の展開を通して極めて明示的に両者の対立が表出されていたことや、また両者の台詞を構成する語彙は John と Loving のそれぞれが担う人格や衝動を反映するかのよう、John の台詞には比較的 positive な語彙が、そして Loving の台詞には negative な語彙が含まれていたことが明らかにされた。例えば“love”のコロケーションに関して、John の場合は神を示す語彙と、それとは対照的に Loving の場合は“hate”や“Vengeance”など negative な語彙と共に用いられることにより、John と Loving の対照的性質がダイアローグの展開の中で

明示的に表れていることが示された。*Days Without End* のコーパスデータから得られる語彙や文構造やコロケーションに関する情報は、乖離相克する主人公 John Loving の根本的対立関係を示唆し、正にそれはこの作品で提示されている good-evil conflict を反映していることが明らかとなった。

「アメリカ英語における (*the chances are (that)*) について—談話機能, 伝播, 文法化—」

柴崎礼士郎 (明治大学)

本発表はアメリカ英語における (*the chances are (that)*) の談話機能を文法化の観点から考察したものである。複数のコーパスを用いた調査結果から、蓋然性を示す構文としての発達は 18 世紀末から 19 世紀初頭と推察できるため、本論文では The Corpus of Historical American English 1810-2009 (COHA) および The Corpus of Contemporary American English 1990-2012 (COCA) を中心に調査分析を進めた。

談話機能上, (*the chances are (that)*) は常に話者の見解の直前に生起し, 話題導入に特化した機能を果たしている。一方で, 発生初期には “*the chances are ten to one that ...* や *the chances are five hundred to one that ...* のように蓋然性を具体化・強調する修飾要素が散見しており, 意味変化と文法化の観点からも興味深い。

統語変化も興味深い。1960 年代までは *the chances are that* が優勢であるが 1970 年代以降急速に使用頻度が下がる。一方, 無冠詞の *chances are that* が 1970 年代と 1980 年代に優勢となるが, 1990 年代以降は冠詞および補文化辞を伴わない *chances are* が他を圧倒する (COCA の場合にも *chances are* の使用頻度が最も高い)。使用頻度が高まるにつれて *the chances are that* > (*the chances are (that)*) > *chances are* と統語的縮約を提示する過程は文法化の観点からも自然である。話者の見解の直前に生起する談話統語上の制約を加味すると, 投射機能を担う構文 (i.e. “projector constructions”) の事例と判断できる。

質疑応答の中心は以下の通りであった。一つは, 今林修先生 (広島大学) より頂いた「COHA にはイギリス英語も含まれている点に留意すべき」という御指摘であった。発表後にマーク・デイビーズ先生 (ブリガムヤング大学) と意見交換を行い次の点を確認した。COCA および COHA とともにアメリカ英語からなるコーパスであるが, 膨大なデータの中にはイギリス英語が入り込んでいないとは言い切れない, とのことであった。もう一つは渡辺拓人先生 (熊本学園大学) より頂い

た「1980 年代に (*the chances are (that)*) の使用頻度が少ないのは何故か」という質問であった。構文はネットワーク上に発達する点を考慮すると他の構文と競合があった可能性, あるいは, *the chances are that* から *chances are* へと変化が急速に進む狭間であった可能性がある。貴重な御指摘に感謝しつつ今後の課題としたい。

「コーパスを使った歴史社会語用論研究の試み」

椎名美智 (法政大学)

「歴史社会語用論」は歴史語用論から派生しており, 過去の社会におけるコミュニケーションの状況・変化の様相を観察することを目的とする新しい研究領域である。本発表では, その具体例として, 呼びかけ語の言語的特徴, 発話者の社会言語学的属性, 発話の語用論的属性をアノテーションとして付与したオリジナルコーパス Vocative-focussed Sociopragmatic Corpus を使い, 初期近代英語期における「呼びかけ語」の一般的な使用傾向と例外的使用例を, 演劇テキストと裁判テキストにおいて, 質的・量的に分析した。

演劇テキストは日常生活を反映しているためか, 多様な呼びかけ語が高頻度で使用されており, 人間関係調整機能 (権力関係, 親疎関係の調整) を果たしていた。一方, 裁判テキストは対立関係にある話者による, 限定された目的のためのフォーマルな場面での発話であるため, 多様性においても頻度においても制限が多く, 会話調整機能 (発話者の特定, 話順の明示・調整, 発話の開始・終了の合図) でしか呼びかけ語が使用されていないことがわかった。身分の上下関係による呼びかけ語の選択についても, 二つのテキストには差がみられた。裁判テキストにおいては, 身分差が呼びかけ語の選択制限 (ポライトネスへの指向性の差) にそのまま反映されていたが, 演劇テキストにおいては, 身分差がある場合には選択制限があるものの, 対等な人間関係においては自由度が高くなっていた。

例外的用法としては, 演劇テキストでは権力関係と親疎関係が矛盾する「主人と召使の例」, 裁判テキストでは社会的身分と社会的役割の上位下関係が矛盾する「王と裁判長の例」を観察し, どの属性が呼びかけ語選択に影響を与えているかを考察した。

最後に, 歴史社会語用論という学際的領域における共同研究の可能性と有用性を述べ, 専門の異なる言語学者による共同研究を呼び掛けて, 発表と質疑応答は和やかな雰囲気で行われた。

第2日第3室

「学習者誤用コーパスからみる *think about* と *think of* の違い」

大熊洋祐 (東京外国語大学大学院 S)

本発表は 2011・2012 年度の 2 年間東京外国語大学英語科 1 年生によって書かれたエッセイを集め構築されたコーパス(国際日本研究センター支援: 学生数 153, ファイル数 1,656, 添削前総語数 279,001, 添削後総語数 283,186)の中に存在する誤用のうち, *think about* と *think of* の誤用について分析したものである。本コーパスにおいて *think of* とすべきところを *think about* を用いていた例が 5 件, その逆が 9 件見られた。両表現とも英語学習の初期の段階で学習される表現であるが, 日本語母語話者にとっては両者の意味の違いが必ずしも明確に理解されていないということが明らかになった。

エッセイを添削した英語母語話者によると *think about* は「ある一定期間考える」ことを意味し, *think of* は「何かを思い出す」ことや「何かを突然思いつく」ことを意味するという。

先行研究により *about* は本来空間(空間移動)を表す前置詞であると考えられ, *think* の主体(動作主)が *think* という動作を行い, その考えるという意識が対象に向かって移動するように働きかけていると認知される。ただし頭に思い描く対象は必ずしも明確に定まってイメージされるわけではないため, Radden(1989: 570)が述べる空間的イメージを持つ *about* が選択される。そして対象に向かって移動するには一定の時間を要するため, 時間の長さを含む表現(深く考える=*consider*)の意味にも使用することができる。一方 *think of* に関しては, *of* が元来は分離を表す前置詞に由来しているため時間的な幅が生じず, 瞬間的・直観的な認識として捉えられている。

BNC でも *think about* は *carefully*(11 例), *too much*(7 例), *a lot*(4 例), *seriously*(3 例)のように時間の幅や程度の深さを表す副詞や *for* 前置詞句(21 例)と共起する傾向が高かった一方, *think of* にその傾向はみられなかった。また共起する名詞句に違いは見られなかった。

質疑応答では, 発表においてコーパス全体における前置詞の使用/誤用頻度に関する報告がなかった点, 及び共起する語に関して動名詞や冠詞に注目してみてもどうかという貴重な助言を頂いた。

「絶対形容詞の意味シフト可能性」

木山直毅 (大阪大学大学院 S)

本発表は, スケール性に関する先行研究が提案

する理論の検証と, 検証の際に用いた程度副詞 *very* の意味を記述した。

スケール性に関する研究は, 形式意味論の理論内で Kennedy and McNally (2005) (より発展させたものとして Kennedy (2007)) と Sassoan and Toledo (2011) で別々の考え方が存在する。Kennedy らの考え方は, *empty* や *full*, *available*, *complete* などの段階的形容詞を絶対形容詞と呼び, *tall* や *expensive* などとは区別した。Kennedy らが主張する絶対的形容詞は, スケール上の末端 (endpoint) を表すというものである。そのため, 比較の基準は文脈から独立したものであることを主張した。一方で, Sassoan らの研究は, 絶対形容詞であっても文脈に依存した基準を持つということを主張し, 両者で考え方は拮抗している。そこで本研究では, 複数ある考え方において, コーパス (BNC) で得られるデータをより広く扱える理論を検証した。結果として, Sassoan and Toledo の方がより適切な理論であることを明らかにした。

本発表は, 理論の検証に加え, スケール性において重要な指標である程度副詞 *very* の用法を検討した。従来, *very* の意味は形容詞が持つ基準を引き上げることが言われてきた。例えば *_very_tall* が真となる場合は *_tall* よりも高い基準を超している場合に限る。しかし, *very empty* のような表現において, そのような意味は考えにくく, *very* の意味を再検討する余地がある。そこで本研究では, 段階性を持たない形容詞に結びつく場合の「まさに」という意味が, 絶対的形容詞に共起する *very* にも見られることを提案した。

質疑応答の際には, 絶対的形容詞と共起する *very* には皮肉であったり話者の感情であったりというものが入っている可能性があることを指摘いただいた。この指摘は的確であり, 本発表が扱っていない現象である。しかし, BNC を用いて話者の感情や皮肉を分析するのは困難であるため, この指摘に関しては今後の課題としたい。

「句構成パターンに基づく前置詞のクラスター分析—図と地の理論を用いた前置詞句とその多義性の分析—」

鎌倉義士 (愛知大学)

前置詞の語義には言語使用者の心的表象に表れる概念となるイメージスキーマが深く関連する。本研究では, 前置詞の場所の意味から比喩的な意味までの多義を前後する名詞句の構成パターンで分類し, さらに対象となる 7 つの前置詞句の構成パターンをクラスター分析にて表すことが可能かを試みる。

先行研究にて、前置詞の意味は認知言語学の理論である「図と地 (trajector and landmark 以下 TR, LM)」の二つの事物の関係から説明がされている (Langacker 1987, Tyler and Evans 2003)。それに基づき、前置詞の前後に共起する名詞句の組み合わせが前置詞のそれぞれ異なる意味と関係するという仮説をたてた。まず、前置詞と名詞句からなる前置詞句が人間の認識を反映すると仮定した上で、前置詞と共起する名詞句を「有生物 (人・動物など)」、「無生物 (車・場所など)」、「抽象物 (問題・時間など)」の三種に分類した (Schönefeld 2006)。続いて前置詞と名詞句から成るパターンが場所的意味と比喩的意味で異なるのか、もしくは場所・時間・比喩などの意味で特徴的な名詞句のパターンを示すのかという分析を行った。その結果として、前置詞と共起する名詞句のコロケーションによって前置詞の意味が特定可能であることを示した (Kamakura 2011, 2012)。

本研究では、前置詞や名詞句にタグ付けがされた ICE GB コーパス (サイズ 100 万語) より in, on, at, over, through, into, against それぞれ 7 つの前置詞と共起する名詞句を含む 100 例を抽出し、その句構成パターンを検証した。前述した研究と同様に、共起する名詞句の組み合わせを三種に分類し、その組み合わせの多寡が残差分析による数値にてどのような違いを示すかに着目した。クラスター分析の結果、それぞれの前置詞の名詞コロケーションが示すパターンは前置詞のイメージスキーマと合致した。場所や時間を含め、場所的な意味から抽象的な意味まで使用される in と at は同じ句構成パターンを持つ前置詞と分類された。さらに、同結果にて over, into, through は同じクラスターに分類された。この結果は、それら 3 つの前置詞が起点・経路・着点のスキーマを共有する (Dewell 1994, Dirven 1989, Lindstromberg, 1998) という認知言語学の主張と一致する。

質疑応答では、クラスター分析において軸の反転を利用するのはどうかという提案があった。発表者の気づかなかった点を指摘してもらい、更なる研究に応用していきたい。

「統語依存関係コーパスからの構造特性特徴量抽出」

大矢政徳 (目白大学)

本研究では、The English Web Treebank corpus (Linguistic Data Consortium 2012) に対して Stanford Dependency standard (de Marneffe, MacCartney, & Manning 2006) に基づき単語間の統語依存関係に関するタグを付与した英語コーパス(a

Gold Standard Dependency Corpus for English, 以下 GSDC)(Silveira, Dozat, de Marneffe, Bowman, Connor, Bauer & Manning 2014)を用い、その単語間依存関係を客観的に把握する手法を紹介した。GSDC 内部では、各単文中のどの単語がどの単語に依存していて、どの依存タイプに属するかが人力でタグ付けされている。GSDC に含まれているのは、ブログ記事、ニュースグループのスレッド記事、電子メール、製品のレビュー、そして質問サイトの解答文といった、書き言葉でありながらもくだけた使用域に属するジャンルの英文である。

本研究では、コーパス中の各単文を単語のネットワークと見立て、その単語間の統語依存関係の構造特性を数値化する手法(Oya 2013, 2014, etc.)を適用し、GSDC 中の異なるジャンルに含まれる単文の構造特性に異なる傾向がみられるかどうかを検証した。ここで構造特性値として取り上げたのは、度数中心性(degree centrality)と近接中心性(closeness centrality)であり、前者は単文の統語依存構造の平らさ(どの程度一つの単語に他の単語が依存しているか)を示し、後者は統語依存構造の深さ(どの程度一つの単語から他の単語まで埋め込まれているか)を示す。コーパスに付与されたタグを使ってこれらの構造特性値を計算した結果、度数中心性が1である、平らな統語依存構造を持つ文が GSDC 中に比較的高い頻度で使われていることが判明した。この平らな統語依存構造の文は、GSDC 以外の英語コーパスのうち、よりくだけた使用域に属するジャンルの英文によく見られることにも言及した。この点に関して、これは GSDC だけの性質ではなく、英語という言語に特有の性質ではないかという質問が出た。これに対しては、GSDC 以外のコーパスも研究対象に取り入れ、さらなる検証が必要であると述べた。また、日本語と英語との対訳コーパスを使って統語依存構造の比較を行った結果について触れ、日本語の統語依存構造が英語のそれよりも平たい傾向にある点を述べ、本研究で述べた手法が言語間の構造特性の客観的把握に寄与する可能性も示唆した。

■ 講演

「タスク駆動型のコーパス構築と情報処理技術」

田中省作 (立命館大学)

講演者の田中省作氏は、今回英語コーパス学会が初めて開催された九州の地で自然言語処理を修めた情報学研究者である。本講演では、情報学研究の立場から「コーパス構築」を論じられた。

まず、コーパス研究と情報学研究それぞれで、「コーパス」や「情報処理技術」に対する認識の相違が述べられた。情報学でも応用指向が強い研究において、新技術開発が中心的な関心であり、コーパス構築は研究過程の一つとして位置づけられることが多くなる。それを踏まえた上で、講演者らによる 1. 英語科学論文における表現上の質推定, 2. 学校文法に基づいた英文解析という新技術開発を目指した 2 つの研究事例が具体的に示され、その際に採られたコーパス構築との共進戦略が紹介された。

近年、コーパス研究でも、研究対象となる言語現象や取り扱うべき言語素性が多様化、複雑化しつつあり、このような情報処理技術を活用したコーパス構築の効率化は、ますます重要となることは間違いない。一方で、本講演で示されたようなコーパス構築を助ける情報処理技術の高度な活用・開発は、今次のコーパス研究の学術的背景を勘案すると、一般的なコーパス研究者にはまだまだ関が高いと言わざるを得ない。今後、両研究分野のさらなる連携が必要不可欠であり、本講演があらためてそういった契機になることを希望したい。なお、講演内では、いわゆる理系研究者である講演者が英語コーパス学会など、いわゆる文系研究者らと交流する経緯や恩恵についても語られた。本講演の骨子は、機関誌『英語コーパス研究』21号に掲載されている。

■ シンポジウム

「英語教育・研究のための教材コーパスの構築と利用：実践例と課題」

司会 石井康毅 (成城大学)
藤原康弘 (愛知教育大学)

学習者のアウトプットを集めたコーパスと比較すると、インプットをコーパス化して分析するという取り組みは十分になされてきたとは言いがたい。本シンポジウムは、インプットデータである教材コーパスの構築と利用についての意義・ノウハウ・課題などを共有することを目的として企画された。

「小学校英語ウェブコンコーダナーの構築と利用：教科化を見据えて」

講師 藤原康弘 (愛知教育大学)

発表者等が構築した「小学校英語ウェブコンコーダナー」(Bora & Fujiwara, 2012-)の作成とその作成過程における問題点、および当ツールの教育・研究利用の事例について紹介した。具体的な問題点としては、著作権の扱いや 1 語 1 タグ

の限界を示し、教育・研究例としては今後の小学校の英語の教科化を見据えた言語材料の調査例が示された。

「中高英語教科書コーパスの構築と利用例」

講師 中條清美 (日本大学)

最初に、いわゆる「教科書コーパス」の定義とその役割について述べ、次に、日本および海外における英語教科書コーパスの構築例とコーパスデータの分析例に関する先行研究を概観した。最後に、実際に中高英語教科書の教科書本文を入力、校正して教科書コーパスを構築した、中村他(2008)や中條他(2008)にもとづいて、英語教科書をコーパス化する際の留意点について報告した。

「CEFR レベルに基づいた教材コーパス：レベル別基準特性の抽出に向けて」

講師 内田諭 (九州大学)

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) に基づいた教材コーパスの作成について、その過程で生じる対応すべき問題点や応用方法などについて報告した。問題点として、入力データの精度、POS タグなどの付加情報の精度、サンプリングの精度などを指摘した。また、応用方法として、CEFR レベルと基本語のコロケーションの対応分析の結果を示し、これらが CEFR レベルを弁別しうる基準特性として機能することを論じた。

「英英辞書の定義・用例コーパスの構築と利用例」

講師 石井康毅 (成城大学)

主要な上級学習者向け英英辞書 5 点の全ての定義と用例 (約 900 万語) のコーパス化と、検索システムについて紹介した。(必要なプログラムは希望者に配布可能である。) 辞書のデータは難度・長さ・信頼性の点で教育目的で使いやすいという特徴がある。その上で、データの利用例 (用法の確認) と分析例 (各辞書の定義語彙の分析) を紹介した。

2015 年度春季シンポジウム「コーパス関連専門科目の授業内容について」開催報告

2015年4月25日(土)、関西大学(千里山キャンパス 岩崎記念館)にて標記のシンポジウムが開催されました。

シンポジウム：

《コーパス関連専門科目の授業内容について》

2015年4月25日(土) 午後2:30-5:30

司会進行：滝沢直宏(立命館大学)

講師：大名 力(名古屋大学)

講師：佐野 洋(東京外国語大学)

講師：滝沢直宏(立命館大学)

講師：田中省作(立命館大学)

講師：西原俊明(長崎大学)

これまで「英語の授業でのコーパス利用」については、英語コーパス学会でもしばしば議論されたことがあります。コーパスに関する専門科目(学部・大学院)については議論されたことはありませんでした。そこで、このシンポジウムは、コーパスに関する専門科目の授業概要、到達目標、内容などを紹介し、参加者との意見交換をしつつ、専門科目の有り様について考えるという意図を持って企画されました。

このシンポジウムでは、講師をお務めいただいた5名の先生方それぞれの所属大学における取り組みについてフランクに語っていただきました。担当科目の位置づけや、受講学生のバックグラウンド、シラバスを編む上で中心に据えるテーマ、到達目標の設定、教授法における創意工夫、さらには授業実践において直面する難点や課題について多様な角度から切り込んでいただき、このイベントが意図した通りの活発な情報交換が行われたのではないかと思います。

企画の立案から当日の司会進行まで、このシンポジウム実現のためにご尽力いただいた滝沢直宏先生、そして素晴らしい会場をご準備いただいた関西大学の水本篤先生に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

新入会員紹介(6月30日現在 Sは学生会員)

(株)大修館書店

内堀 朝子(日本大学)

大橋 由紀子(ヤマザキ学園大学)

奥山 慶洋(茨城工業高等専門学校)

Kathryn OGHIGIAN(早稲田大学)

草薙 邦広(名古屋大学大学院S/日本学術振興会)

熊谷 優一(筑波大学附属坂戸高等学校)

後藤 克己(中部大学S)

高橋 有加(東京外国語大学S)

長沼 君主(東海大学)

榊原 克己(昭和女子大学S)

柳 善和(名古屋学院大学)

山岡 幸高(九州大学S)

山口 有実子(東海大学)

山本 五郎(広島大学)

横田 賢司(日本大学)

会誌『英語コーパス研究』第23号論文投稿募集について

『英語コーパス研究』第23号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフトウェア紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【原稿提出締め切り】2015年11月30日(月)

電子メール添付にて提出してください。提出方法等についての詳細は学会Webページの投稿規定http://jaecs.com/jnl/jnl_kitei.pdfを参照してください。

※なお、本文や図表の体裁および参考文献目録の表記の統一などに関して第22号を参照の上、十分にご配慮ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

『英語コーパス研究』編集委員会

e-mail: jaecs.ed@gmail.com

【採用通知】2016年1月

【刊行予定】2016年5月下旬

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
瀬良晴子(兵庫県立大学)

東支部活動報告

東支部では、以下の通り、2015年3月7日(土)に講習会が行われました。

講習会

【タイトル】フリーソフトウェア「KH Coder」による英文テキストの統計的分析とコンコーダンス作成

【日時】2015年3月7日(土) 13:00~15:00

【場所】日本大学文理学部 ML1(PC教室)

【講師】樋口耕一先生(立命館大学)

【参加者】38名

東支部長

塚本聡 (日本大学)

■今後の大会日程と開催校

- (1) 第 41 回大会は 2015 年 10 月 3~4 日に愛知大学名古屋キャンパス (愛知県名古屋市) において開催されます。詳細については 8 月下旬にお送りする大会資料ならびに当学会ウェブサイトをご覧ください。
- (2) 第 42 回大会は 2016 年 10 月初旬に成城大学 (東京都世田谷区) にて開催する方向で現在調整を行っています。

■寄贈刊行物の紹介

以下の図書の寄贈がありました。心より御礼申し上げます。

内田諭 (2015), 『フレーム意味論に基づいた対照の接続語の意味記述』花書院 (内田諭先生より寄贈) <http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-1026324096-00>

岸江信介・田畑智司 編 (2015) 『テキストマイニングによる言語研究』ひつじ書房
<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-695-2.htm>

高田博行, 渋谷勝己, 家入葉子 編著 (2015) 『歴史社会言語学入門』大修館 (家入葉子先生・内田充美先生より寄贈)
<http://plaza.taishukan.co.jp/shop/Product/Detail/21183>

塚本倫久 (2014) 『プログレッシブ 英語コロケーション練習帳』小学館 (塚本倫久先生より寄贈)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09310539>

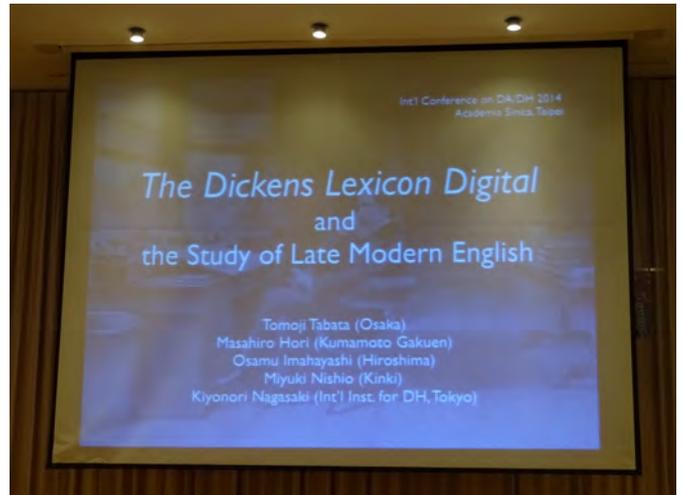
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

◆ 第 5 回 DADH 国際会議に参加して

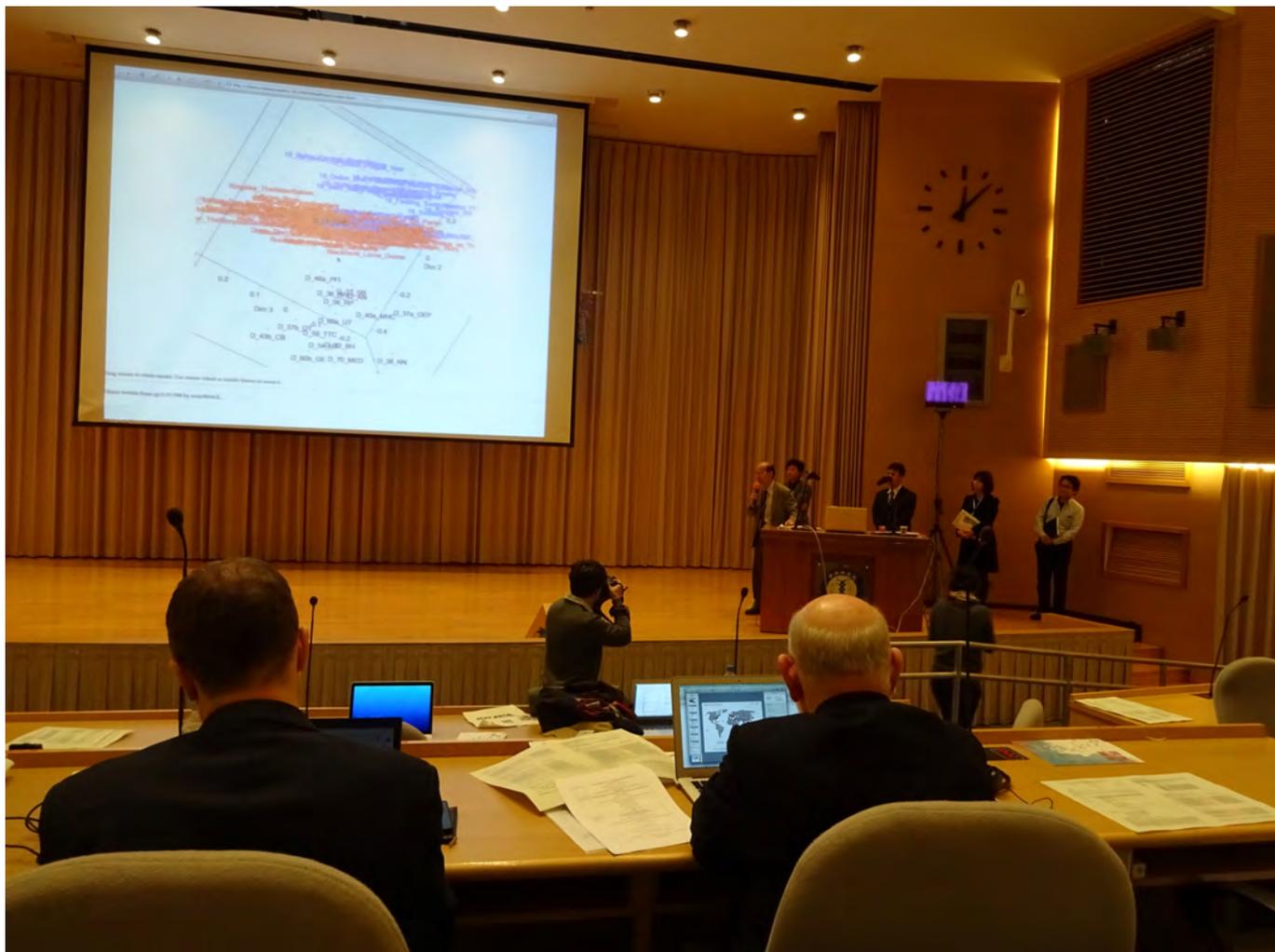
地村彰之 (広島大学)

この度, 2014 年 12 月 1 日(月)と 12 月 2 日(火)に台湾(中華民国)台北市で開催された第 5 回 DADH 国際会議(The 5th International Conference of Digital Archives and Digital Humanities 2014)に参加しました。11 月 30 日(日)に広島空港から約 2 時間



で台湾台北市桃園空港に到着しました。丁度広島空港で近畿大学の西尾美由紀さんと一緒になりました。これまで 9 回も出張で訪問しました大陸の中国(中華人民共和国)のように, 台湾は中国語が使われている国ですが, 私にとって遠い国であるとは思えませんでした。何となく親日的な雰囲気が漂っていました。このような好印象のお蔭でしょうか, 初めてのところで初めてのバスに乗って空港から台北市内まで行って, ホテルの近くのバス停で無事降車することができました。西尾さんのナビのお蔭でもあります。バスから降りて, マップを見ながらホテルの位置を確かめていたときに, そばを通っていた方が穏やかな雰囲気で案内してくれました。ただし, とんだ勘違いがあって, 先方はホテルではなくて妊婦さん用の病院を探していると思われたようでした。その時, 台湾駐在のある日本人の方から声がかかり, ホテルまで連れて行ってくださったのはありがたいことでした。前置きはそれくらいにして, 本論に入ります。

第 1 日目は, ホテルから会場にタクシーで行きました。予定より時間がかかり, 会場に着いたときはすでに開会式が始まっていました。出席者数は 100 名から 150 名であったかと思います。英語コーパス学会関係者は, 堀先生, 滝沢先生, 田畑先生, 西尾先生と私でした。今林先生は仕事の都合で第 2 日の発表に合わせて来られるとのことでした。デジタル・アーカイブやデジタル・ヒューマニティーズは, 学際的な人文学と言われ, 哲学, 歴史, 文学, 言語学, 地理学, 考古学, 文化財学, 音楽, 芸術などの多岐に亘る研究と教育に関わります。研究者や専門家たちは, コンピュータを駆使して分析を重ね, データを視覚化したり, データを記録・保存したり, データの検索方法を工夫するなど, 最新のコンピュータ技術の成果を取り入れて研究を進めています。実際, ヴァライ



アティーに富んだ発表を見て聞くことができました。英文学の写本の話も発表の中にありましたので、身近に感じたことは事実です。ありがたかったのは、中国語を使って発表された場合、英語による同時通訳で説明を受けたことです。(逆に英語で発表された場合、中国語で同時通訳されていたと思います。)

ここで、第2日目の Dickens Lexicon の話に入ります。本大会唯一の Panel Presentation として採択され、その上、90分もの時間が与えられましたのは、田畑智司(大阪大学)、堀正広(熊本学園大学)、今林修(広島大学)、西尾美由紀(近畿大学)、永崎研宣(人文情報学研究所)の五氏による The Dickens Lexicon Digital and the Study of Late Modern English でした。まず、司会の田畑氏が、山本忠雄博士(1904-1991)が構想した Dickens Lexicon をデジタル化し、The Dickens Lexicon Digital (DLD) を編纂してきた経緯と、後期近代英語研究への DLD の活用の可能性を概観されました。次に、西尾氏が山本博士のイディオムの定義とディケンズの言語芸術の中でのイディオムの重要性について DLD から用例を引きながら詳述されました。今林氏は DLD 搭載の 18 世紀と 19 世紀の小説

コーパス (250 texts, 39,038,653 word-tokens) を活用し、ディケンズのイディオムの特徴を “in a jiffy” と “in so many words” の adverbial idioms から説明されました。また、堀氏は前述のコーパスを駆使し、ディケンズの idiomatic wordplay を “by degrees” と “to some extent” を取り上げ、造語、派生、変容、安定性の面から論じられました。最後に、田畑氏が Dickens Lexicon をデジタル化するなどのような新しい発見があるのかを最新の Digital Humanities の手法を援用しながら Digital Enhancements to the Dickens Lexicon と題して締めくくりの発表をされました。各氏の発表終了後には活発な質疑応答がありました。尚、本研究は、科学研究費助成(基盤研究(B)26284068)の成果の一部です。

12月2日(火)は、Dickens Lexicon Project のシンポジウムを拝聴してから、すぐその場を後にして帰国の途につきました。タクシー、地下鉄、バスを利用して桃園空港に到着しました。帰りは一人旅でした。

2015 年 7 月 1 日発行

編集・発行 英語コーパス学会
会長 堀 正広
事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院言語文化研究科
田畑 智司研究室気付
電話：06-6850-5866
e-mail: jaecs.hq@gmail.com twitter: @JAECS2012
URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/>
